

“おもしろさ”も取り入れた 教育プログラム開発に向けて

東京大学医学部附属病院
臨床シミュレーションセンター
江頭 正人先生

誰もが一定のレベルに到達できる シミュレーションセンターに

暖冬の晴れた空の下、東京大学医学部附属病院へ向かう。歴史を感じるレンガ造りの建物と真新しいビルのコントラストが眩しい。2019年9月に新しくなった「臨床シミュレーションセンター」は東京の下町が一望できる高層階にある。

誰もが名前を知る大学病院であり、移植医療・ゲノム医療など、未来の医療を牽引する研究機関でもある。その教育の一端を担っているセンターとは、果たしてどんなところなのか、緊張しながら門をくぐった。



臨床シミュレーションセンターの新設



臨床シミュレーションセンターの方針や開設の経緯は？

「院内の職員、医学生、看護学生、若手を中心として、誰もが一定のレベルに到達できるシミュレーションセンターに。」優しい口調でこう話すのは、センター長である江頭正人先生。

160年以上の歴史を誇る東京大学医学部附属病院（以下、東大病院）の看板を背負うセンター長は、想像と異なり穏やかな佇まいである。

同センターの入っている病棟が新設されるまでは、トレーニングスペースは十分に確保されておらず、設備の古さなど、歴史が長いゆえの課題も多く、有効活用できていなかったという。その様な状況のなか好機が訪れた。病棟新設に併せシミュレーションセンターの懸案が持ち上がり設立の運びとなった。

そして、基本技術を学ぶメインスペース、東大病院同様に設計された模擬病室、新しい医療機器導入の際一時的な講習に利用する小研修室などが設けられた。（右頁参照）

東京大学医学部附属病院 クリニカルシミュレーションセンター

大きさ：約 415㎡

シミュレーション室

主にタスクの手技が学べるスペース。常時シミュレータが並ぶ。



多目的スペース

講義やトレーニングに使用できるスペースを確保。

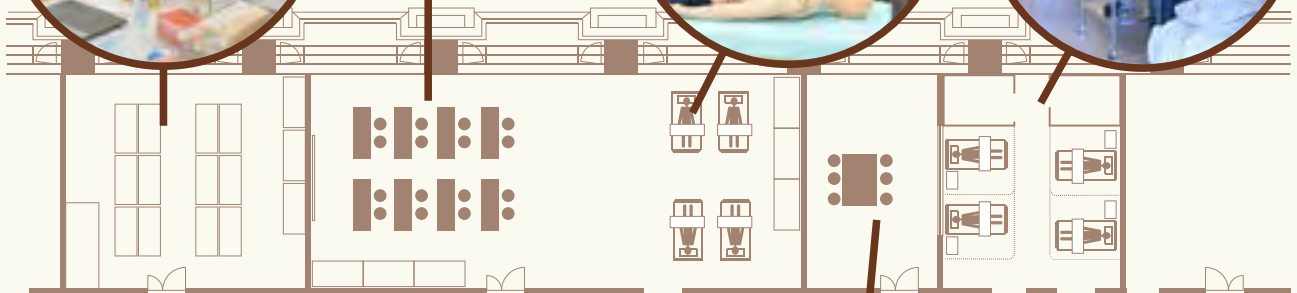
救急スペース

BLS、ALS のトレーニングでグループ教育に使える広いスペース。



模擬病室（4床）

東大病院と同じ設計だという模擬病室。全身型のシミュレータが横たわっている。トイレやシャワールームも完備。



研修室

収容人数は 50 名。プロジェクターなどの設備も充実。



倉庫

シミュレータや備品を保管できる、大容量の倉庫。空いた時間にトレーニングできるようにと、看護部への貸し出しもある。



小研修室

病院に新しい設備（医療機器）を導入する際などに、医療安全の講習で利用。実際の機器を持ち込み実施。

東京大学医学部附属病院

〒 113-8655

東京都文京区本郷 7-3-1

クリニカルシミュレーションセンター

<https://www.h.u-tokyo.ac.jp/soken/simulator/index.html>

自己研鑽を効率的に

センターは、いつでも自学自修できる環境が整っている。病院や大学への在籍が確認できれば、ウェブから利用予約ができ、技術に不安を覚えたときなど気軽に訪れることができる仕組み。

シミュレータは出し入れする必要なく、手技別に配置されており、すぐに使える状態になっている。さらに、常時手技の動画が視聴できたり、一人でも動画を撮影して振り返りができる様にタブレットPCが設置されている。決して大それた設備ではなく“さりげない工夫”…随所から、江頭先生や管理人さんの気配りが感じられる。



↑自分で動画撮影ができるよう、タブレットPCを設置



壁を見ると「(使用後は)原状復帰」の四文字。個々の能力・自主性を尊重した自学自修スタイルに“東大気質”が滲み出ている。

シミュレーションのコツを、
スナップ写真で

大解剖



自学自修を促すチェックリストコーナー。手技別にバインダーが用意されており、すぐにトレーニングにとりかかることができるようになっている。



オリジナルで制作した、指導者用ベスト。モチベーションアップにも一役買う。皆の意見を尊重して、シックなネイビーに決定したという。



OSCEを意識して、各シミュレータにひとつずつストップウォッチを設置。一人でも、時間を意識したトレーニングを実現。



動画視聴用のモニターとパソコンを常設。動画を見ながらの自己演習も可能だ。

シミュレーション教育は 技術習得を効率化し 患者さんの医療安全を確保するもの

“おもしろさ”も取り入れた教育プログラム開発に向けて



シミュレーション室を覗く



教育用エコー装置で腹部ファントムをみる

シミュレーション教育の今後に期待することは？

世の中には、シミュレーション教育を、臨床とは違う、お遊びの様だと捉える人もいる…けれど、本来のシミュレーション教育とは、臨床で求められる技術習得を効率化するためのものであって、最終的には患者さんの医療安全につなげるもの。そこを見失ってはいけないよね。だから、ハード(シミュレータ等教材)とソフト(教育プログラム)の両側面を発展させていくことが重要だと思う。

シミュレーション教育を推進していくためには？

個人的には、新しい技術を積極的に導入したり、いわゆるゲーム性をシミュレーション教育に取り入れていくこと、『おもしろさ』という部分も大切にしていきたい。その面白さは、トレーニングの需要を抱えた潜在的な層を引きつけるトリガーにもなるし、人が集まりにくい分野に(学生から)関心を持ってもらうなど相乗効果も見込めると思う。例えば、東大の特色である工学部と医工連携による教育コースの開発や、京都科学と産学連携による教材開発など、お互いの強みを活かして、進めていけたらいいですね。

教育プログラムはどのように構築していきますか？

教育プログラムの策定にあたっては、単に教科書を準えたものではなく、センターでの実証を通して学術的評価を施しながら世に広く発表していきたい。その皮切りとして近く、超音波ファントムを利用した研修プログラムの開始を予定しています。

さらに「将来的には、狭義のシミュレーション教育の枠を超えて、臓器移植など臨床分野と連動した教育も実施していける施設になったらいいなあ。」と語られた江頭先生。東大病院のノウハウと、京都科学のものづくりがコラボレーションする日を想像しながら帰途についた。

東京大学大学院医学系研究科
医学教育国際研究センター 医学教育学部門 教授

えとう まさと

江頭 正人 先生

1989年 東京大学医学部医学科卒業。その後、東京山手メディカルセンター内科、自治医科大学 循環器内科、チューリッヒ大学 循環器内科の研究員を経て、2005年に東京大学大学院 医学系研究科 加齢医学 講師となり、2011年東京大学医学部附属病院 教育研修部へ。2017年5月より現職。

内科専門医／老年病専門医／循環器専門医／日本血栓止血学会認定医／臨床研修指導医など資格多数。

外部では、2014年から医師国家試験委員を勤める。



編集後記

忙しいスケジュールの合間を縫って取材に応じていただき、ありがとうございました。

患者数も職員数も指折りの大都市病院で、教育部門を担うご苦労は想像に容易いのですが、ユーモアと知性でそれを感じさせないお人柄が印象的でした。